

世界のオペラ歌手に聞く

②

ルカ・ピサローニ (Br)

オペラは上演時に発生している話のようにつ 演じるのが理想的だと思います

取材・文 中東生
Text Shinobu Naka

愛する仕事ができない

「ロックダウンの間、「毎日一人でも歌っているよ」という同僚たちをうらやましく思いながらも、自分は気分が鬱々としていて、歌う意義が見出せません。歌うために勤勉な生活を送ること自体を休止して、庭仕事などをして過ごしています。最後の公演は3月7日にメトロポリタン歌劇場で歌ったモーツァルト《ゴジ・ファン・トゥツテ》で、肉体的にはたっぷり休息が取れていますが、精神的にはよい状態ではありません。愛する仕事ができないという状況は心に傷を残すほどです。私たち歌手は世の中から忘れられていると感じます。コロナ前に戻れることは、もうないのではないのでしょうか」と、辛そうな様子だ。

《アイーダ》でオペラ初体験

これほどに愛する職業には、どんな経由で辿り着いたのだろうか。「宿命というか、ヴェルディの街アッセートで育ったので、子供のころから音楽に囲まれ、オペラ歌手になる以外の選択肢はなかつ

Interview with Luca Pisaroni



ロックダウン中は庭仕事などをして過ごしていたというピサローニ
©Catherine Pisaroni

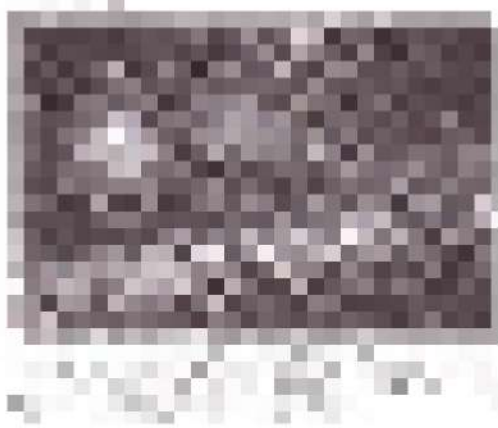
新型コロナウイルスの爆発的感染が報じられたイタリア国民として、ウィーンに居ながらその惨状に胸を痛めてきたルカ・ピサローニ。「舞台に立たずしては生きていけない」という自分を再確認した彼に、演じることについて語ってもらった。

たように思います。教会の聖歌隊に入っていたので、自分の声でなにかを表現する日常に惹かれていました。ピアノも習い、「音を奏でる」ということ自体も好きでした。11歳のころ、父が連れて行ってくれたアレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭のヴェルディ《アイーダ》が初オペラで、その後はヴェルディ《椿姫》、プッチーニ《蝶々夫人》、ヴェルディ《ナブッコ》と観て、オペラに夢中になり、

録音を集めたり、「ヴェルディ友の会」に入会して鑑賞旅行などにも行ったりしました。ミラノで勉強したものの先生と合わず、アルゼンチン人のレナート・サッソーラ先生に会えるまでは順風満帆とはいえませんでした。ザルツブルク音楽祭でキャリアをスタート

その後、アーノンクルのオーディションを受ける機会に恵まれ、26歳のとき、ザルツブルク音楽祭でウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と、モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》のマゼットを歌えたのは幸運でした。それは翌年2003年のモーツァルト《皇帝ティートの慈悲》プリアオ役にもつながりました。普通はそれほど重要な役柄ではありませんが、アーノンクルの助けと、マルティン・クシエイの演出で、

Column③



たいへん興味深い役になっていました。こうして高いレベルでキャリアをスタートさせられましたが、歌手人生というのは一つの契約からすべてが軌道に乗るといってわけではなく、声の成長に合わせ、また人生のどの時点でどんな役柄を選んでもいくのかがとても重要で、努力を要します。2006年のグラインドボーン音楽祭での《ゴジ・ファン・トゥッテ》も、実際的に注目されるきっかけになった公演です。グリエルモの感情は複合的で、表面的ではありません。傲慢で自信満々のふりをしていく部分と、恋人に裏切られ、傷つく弱い部分も見せられるので演じ甲斐があります。よい演出家の腕にかかると、そのような若気の至りから人間的に成長していく過程も見せられるのです。諸悪の根源であるドン・アルフォンゾはなぜそんな



コロナ禍前に戻れるのか、と不安な様子だ © Catherine Pisaroni

ことをしたのかと考えると、彼も昔、苦い経験、落胆する体験があったからではないか、と思わせる深いオペラです」

いちばん多く歌った『フィガロ』

彼のフィガロも、裏にある動機が一貫して読み取れる等身大の役作りだ。

「フィガロ役は、いままでいちばん多く歌った役柄だと思います。僕はすべての物語の裏に劇的な動機を探してしまおうので、自分の演じる役がどうしてそういう行動を取るのか理解できないと、ただ単に言わ

れた通りに動くことはできないのです。だから稽古中は指揮者や共演者にとって迷惑な存在だと思えますが、自分の動きに関する心理状態を完璧に把握するために、演出家を質問攻めにしてしまいます。オペラが既存の物語としてではなく、上演時に発生している話のように演じるのが、観客にとっても理想的だと思うからです」

しさを盛り込んでいく代わりに、削ぎ落とす必要がありました。本当に権力のある人間は怒鳴る必要がないのです。一瞥だけ、一つのジェスチャーだけのほうがどれほど強い印象を与えるか。「Eh, Siss」と大声で歌わなくても、囁くように歌っても、フロレスタンを殺す恍惚感を感じさせることができる。それを発見させてもらった貴重な体験でした。ほかにもメフィストフェレス(グノー《ファウスト》)、ボーイト(メフィストフェレ)等やオッフェンバック《ホフマン物語》の悪役4役(リンドルフ、コッペリウス、ミラクル博士、ダベルトゥット。通常は一人の歌手が歌い分ける)など、さまざまな側面がある役が好きで、エスカミリーヨ(ピゼー《カルメン》)みたいに、マッチョに登場して、歌って、といった心理描写の光と影のない役はあまり好きになれません(笑)。次の初役、ストラヴィンスキー《放蕩鬼の遍歴》のニック・シヤドウも好きですが、いまは舞台上に戻れたら、どの役でも幸せです!!」

悪一辺倒のドン・ピツァロ(ベートーヴェン《フィデリオ》)を、好んで演じるのはなぜだろう。

「日本で歌ったときは演奏会形式でしたが、ミラノ・スカラ座で2018年に役デビューしたときの演出家デボラ・ワーナーなどの手にかかると、とても演じがいのある役になるのです! 彼女は、『本物の悪人は普通に見える』という怖さに焦点を当て、普通の役人が実は人非人で、驚くほど悪でありえることを表現するため、悪人ら

さまざまな側面がある役が好き

さまざまな側面がある役が好き